公益社団法人　上伊那教育会

令和４年度　第73回 夏期講習会

◇期日：令和４年７月28日（木）　29日（金）　◇場所：上伊那教育会館　講堂

○テキスト
　西田哲学選集　第一巻
　『西田幾多郎による西田哲学入門』
　　第二部「善の研究」
　　第一編「純粋経験」第一章
　　第四編「宗教」第一章～第五章

○講　師
　京都工芸繊維大学　教授　秋富　克哉　先生
　大阪教育大学　　教授　松本啓二朗　先生
　元上伊那教育会長　　唐澤　正吉　先生

◇１日目（７月28日）日程
　開講式　　9:25 ～ 9:45
　討議１　　9:50 ～ 11:20
　討議2･3･4･まとめ
　　12:20 ～ 16:40

◇２日目（７月29日）日程
　＜オンライン＞
　講演会　　9:30 ～ 11:10
　　講師　秋富　克哉　先生
　閉講式　　11:15 ～ 11:40

【開講式から】

浦山哲雄　上伊那教育会長あいさつ

おはようございます。

本年度もコロナの影響はありましたが、唐澤正吉先生には、この場で直接ご指導をいただき、京都工芸繊維大学教授、秋富克哉先生には紙面にてご指導をいただきながら、4回の読み合せ会を行い、本日に到っております。急な日程変更等でご迷惑をおかけしていますが、本年度のまとめとして直に語り合う場を大事にしたいと考え、感染対策をしながらの実施とさせていただきました。

この夏期講習会ですが、今年で73回を数えます。この講習会の始まりは、昭和24年、飯島町の西岸寺で8月３日から3泊4日の日程で行われた夏期講習会に遡ります。「西岸寺講習」と呼ばれるものですが、郡下の青年男女教員が、企画から運営まで一切を担って行われていたということです。そ

の講習会が、哲学の講習会へと特化され、本日を迎えているわけであります。

さて、なぜ哲学か。秋富先生からは「西田哲学には、私たちが生きていく上での基本、たとえば先生方であれば、日々学校で小中学生と触れ合いながら彼ら彼女らとともに自分を高めていく、そのようにして人間として生きていく、その最も大切なことに触れる契機が含まれています。」というメッセージをいただいています。唐澤先生は、「教師としての見方、考え方やその実践は、正に「西田哲学に支えられていた」「すべて繋がっていた」と改めて気がついた」とおっしゃっておられます。テキストに触れ、皆で語り合うことを通して、自分の授業や学級、目の前の子どもたち、そして自分自身のあり様を見つめ直すこと、この2日間、日ごろの教育実践とともに、研修の意味をもう一度自己に問い、再認識する機会としていただければと思っております。

最後になりますが、講師の秋富克哉先生には、本年度が最後のご指導となります。長年にわたるご指導に感謝するとともに、先生のお言葉を心に刻みたいと思います。秋富先生、よろしくお願いいたします。そのような事情で、本年度は、来年度の講師をお願いしております大阪教育大学教授、松本啓二朗先生にも補助講師として、ご指導をいただきます。松本先生、よろしくお願いいたします。唐澤正吉先生には、常に哲学と日々の実践とを関係づけたご指導をいただいています。唐澤先生、よろしくお願いいたします。

それでは、実り多き2日間となりますことをご期待申し上げ、以上、開講の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いします。

【参加した先生方の感想】

〇討議２のレポーターとして宗教について考えましたが、本当に難しくて読み解くのは大変でしたが、いろんな先生方と話し合う中で形なきものを想像し考えることのおもしろさについて知ることが出来ました。また西田哲学と教育の関わりを考えるのもおもしろかったです。

〇テーマが宗教や神といったとても難しい問題だったため事前読み合わせでもよく分からない部分も多かった。今回１日を通して続けて討議をすることで、先生方のお話からなんとなくこんな風に考えればいいのかなと思えるようになった部分がある。西田哲学に迫って行けたかは自信はないが、子どもたちとどう向き合えばいいか考えるきっかけになった。

〇とても充実しており、楽しかった。特に講師の先生方が一緒に話をしてくださったときは、話し合いが活発になったり、みんなで悩んだりすることができてよかった。ズームではこんなに話すことはできなかったと思う。対面で実施することができて本当に良かった。

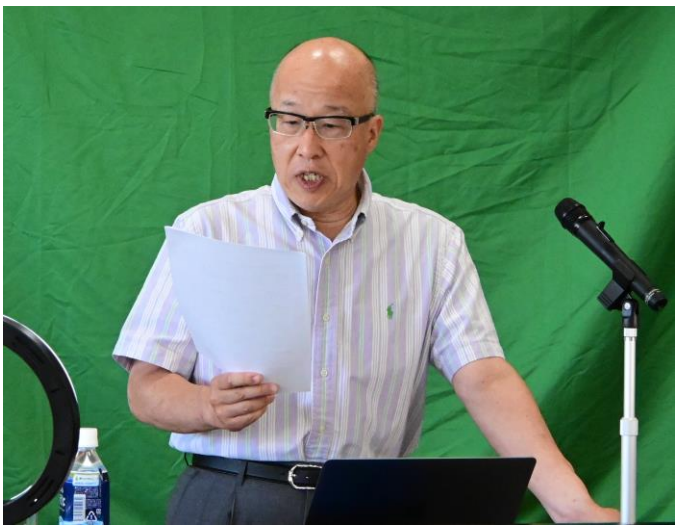
〇初任者の若い方から管理職の先生までキャリアの差はありましたが、話しやすい雰囲気で、どの先生の意見にも共感することができました。また講師の先生が入っていただいたときは直に質問に答えていただき、松本先生からは「敬愛」について秋富先生からは「神、宗教、愛」について整理して丁寧に分かりやすくご指導いただきありがたかったです。また、討議に入る前に司会者から二つの討議の柱を提起していただいたおかげで、短い時間で焦点化して話し合いをするができたと思います。分からないことを率直に出し合うところ

から始まり、分からないままで終わるような感じでしたが、日頃「教育について」「生徒の見方について」なかなか深いところまで考えて話し合うことがないので、このような機会をいただいたことはとてもありがたいことだと思いました。最後に「自己」や「宗教」など日頃私がとらえている言葉の認識では西田哲学を理解しがたく、そのモードへ切り替わるのには時間がかかるように感じます。来年は読み合わせから参加していきたいなと思いました。

講演会

演題『　戦争と西田幾多郎　－ 詩人的にこの地上に住む－』

講師　京都工芸繊維大学　教授　秋富 克哉　先生



【講演会の感想】

〇コロナ禍の収束が見えず、ロシア・ウクライナ間の戦争が起きている「この地上」を、どのように生きていけば良いのか、西田幾多郎の生涯を軸に、大変わかりやすくお話しいただき、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

　オンラインでの講演会となってしまい残念な気持ちもありますが、お話の内容は十分に伝わったと思います。

〇今回、夏期講習に向けてテキストを何度も読んできたが、書かれていることを理解しようとすることで精一杯だった。秋富先生の講演を聴き、西田の生きていた時代や背景を知ることができ、どういう状況でこの課題に取り組んできたかを考えることができた。私たちがあたりまえのように「ここにいること」がそこにいる人や、たくさんの生死、他者や自然とつながっているのだということに思いを寄せることができた。とても熱のある講演でした。できれば、画面越しでなく、その場で聞きたかったという思いもあります。

〇今回は、西田幾多郎が我が国の戦争の時代に何を感じ、どう生きたかについてお話していただき、今の不安

な世の中(パンデミックやロシアのウクライナ侵攻、異常気象等)との関わりを考えさせられました。西田が今を生きていたらどんなことを感じているのか。西田のように今の状況を憂い、何か日本や世界が進むべき方向を見出してくれる存在はいないのか、それは、他人任せにせず本来なら今生きている我々一人一人が真剣に考えなければいけないことでもあると強く感じました。

今回は、難しい哲学論ではなく、人間西田幾多郎の姿や思いを知ることができ、非常に興味深く聞くことができました。

○西田幾多郎の生涯と哲学について、詳しく教えていただき興味深く拝聴しました。哲学に難しいイメージがあるように、哲学者にも難しいイメージを抱いていましたが、西田も身近な人の死や世の中の行く末を憂う人間味のある人なのだと親近感が湧きました。日々、当たり前だと思って見過ごしている生活の中にこそ哲学があるということが印象に残りました。そういった当たり前の日常に目を向けてみると様々な人の力で自分が生かされていることに気づきました。そして、支えてくれる人や自分自身のためにもかくありたいと思う宗教的欲求が目覚めてくるような気がします。

生きているということは、多くの人と共に生きるということだと思います。学校で関わる子ども、同僚の先生方、身近にいる家族など、そういった人々と交流する中で生まれる、内外との統一が私という人格をつくりあげていくということを改めて意識することができました。

【閉講式から】

□ 小長谷結夏　夏期講習運営委員長あいさつ

二日間にわたった夏期講習会も終わりを迎えようとしています。

この二日間、西田哲学を通してさまざまな学びがありました。討議では、先生方の体験をもとにしたレポートを手がかりに、どのグループも白熱した討議が展開されました。残念ながら今回は規模を縮小しての開催となりましたが、とても充実した二日間であったと感じています。

さて、先ほどのご講演では、「戦争と西田幾多郎　詩人的にこの地上に住む」という演題で、いま世界で起こっている戦争と、戦時中を生きた西田の人生を照らし合わせながらお話しいただきました。「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深くつかむことによって最も深い哲学が生まれるのである。」これは、秋富先生の講演冒頭で紹介された西田氏の言葉です。西田氏は、日常の生活が何であるかを最も深くつかむために多くの短歌をしたためました。講演を聴いて改めて、西田氏の身に降りかかった多くの悲しい出来事が哲学者西田幾多郎を作り上げたのではないか、と感じました。また、目の前の子どもの声に耳を傾け、自分事として深く考えることがいずれ未来にもつながっていくのだなと感じました。興味深いお話をありがとうございました。

最後になりますが、ご指導くださいました秋富先生、松本先生、唐澤先生をはじめ、討議でレポーター、司会、記録をつとめてくださった先生方、運営委員、研修委員の先生方、そしてご参会の皆様、すべての方に感謝を申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。

二日間ありがとうございました。

□ 原　浩範　上伊那教育会副会長あいさつ

上伊那の先輩の先生方の思いを受け継ぎながら73回続いてきた夏期講習会を、本年度も充実の内に終えることができ、大変ありがたく思っております。

昨年度はコロナの影響もあり、事前の読み合わせ会の回数を減らさなければなりませんでしたが、今年はオンラインを利用しながらグループでの討議を行うなど工夫して計画通りに進め、学び合うことができました。また、会場の感染防止対策をいつも以上に徹底するなど工夫して、会員の皆様に参集いただき、講師の先生方にもお越しいただくことができました。顔を合わせながら語り合い、直接ご指導をいただくことができ、大変嬉しく思っております。

コロナ禍の中にあり、私たちは「子どもたちにとって必要な学びは何なのか」という根本的な課題にぶつかり、自分自身を見つめ直し、向き合ってきました。そして、哲学の視点から自らの教育実践を見返し、子どもの見方を新たにしてきました。4回の読み合わせ会と夏期講習会を通して、「善の研究」の叙述を具体の子どもたちの姿に置き換えて語り合い、そのなかで自らの子どもの見方を深め合うことができました。常に熱く語り合う先生方の姿に、こうして集い、顔を突き合わせて語り合うことの意味を改めて感じさせていただくと同時に、本年度のテーマ「共に集い　共に学び続ける」、そのような教師としてのあり様の具体を見ることができました。「自己を見つめ、自己に問い、考えを深め、自己を高める」、そんな時間であったと思います。

このような充実した研修ができましたのは、3人の講師の先生方のご指導のお陰であると、大変ありがたく思っております。ここに至るまで、秋富克哉先生には、読み合わせのレポートに沿って、文書による丁寧なご指導をいただき、そして今回、直接ご指導、ご講演を賜りました。また、松本啓二朗先生には、グループ討議やそのまとめなど直接ご指導を賜りました。唐澤正吉先生には、4回にわたり事前の読み合わせでご指導をいただき、そして今回も、常に哲学と日々の実践とを関係づけたご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。

特に秋富克哉先生には、上伊那図書館（現在の創造館）の講堂を会場としていた時から現在に至るまで、大橋良介先生の後を引き継ぎ24年間の長きにわたり、私ども上伊那教育会の会員を指導してくださいました。西田哲学会の会長を務められ、お忙しい時でさえも、夏期講習を大事に考えご指導を続けてくださいましたこと、大変ありがたく思っております。私たちが質問をすると分かりやすく丁寧に教えてくださるなど、とても温かく親しみのもてる先生でございました。そのため秋富先生のお人柄に惹かれて参加する会員も少なくありませんでした。今回をもって、夏期講習会の講師を松本啓二朗先生に引き継がれ、退かれることになりました。長年にわたるご指導、本当にありがとうございました。

三人の先生方におかれましては、これからもますますご健康でご活躍されますことをお祈り申し上げますとともに、上伊那の教職員に対して、今後ともご指導を賜りますことをお願い申し上げます。

また、今日に至るまでの周到な準備と学習を重ね、このように充実した夏期講習会にしていただきました運営委員、哲学研修委員の皆様、司会者・レポーターの皆様、熱心に語り合っていただきました皆様、また講演会にオンラインで参加いただきました皆様に心より感謝申し上げ、閉講のあいさつとさせていただきます。